葦あし

年頭号
vol.195

2025
WINTER

2025年1月1日発行

創立60周年
を迎えます

感謝

1965～

初代病院長 小畠三喜男

1986～

二代目病院長 小畠敬太郎（現理事長）

2020～

三代目病院長 小畠廉平

医療法人㈳玄同会 小畠病院

地域とともに60年

2025 年頭のごあいさつ

みなさま、
新年あけましておめでとうございます。

病院長　小畠　廉平

もう新型コロナウイルスの脅威も今や過去のものと思われる方も増えてきたのではないかと思います。インフルエンザとほぼ同じ扱いになってきた印象ですが、引き続き当院としては感染対策を行っております。その一方でウクライナでの戦闘が未だに続いていることや、物価の高騰は世界情勢のみならず私たちの生活に今でも困難な影響を与え続けています。

さて、昨年は診療報酬改定と介護報酬改定が同時にあった年でもあり、年始めからその対応の協議で始まりました。国は診療報酬や介護報酬の中で、医療機関や介護施設を施策的に誘導していきます。ですが実際現場と乖離した考えに基づく施策もあり、国は現場の声を本当に聞いているのか?と疑問に思うこともあります。私も院長としてなるべく現場の声を聞くようにしていますが、なかなか全てを吸い上げることができないのがもどかしいところです。今後もできる限り現場の声を吸い上げて、その中から病院の次の方針につながるヒントを見つけ出せればと思っております。

皆様は、新年と言えば何を想像しますでしょうか?初詣、雑煮、お年玉、初夢などなどありますが、そのうち初夢の「夢」について少しだけお話しさせてください。夢とは辞書を引くと「将来実現させたいと心の中に思い描いている願い」と書いてあります。現在我々の生活の中でなくてはならないものは数多く存在しています。それは遙か昔から、「将来こんな事ができるものを実現させたい」という先人の夢が達成されたプロセスなのです。では私の夢は何か?というと、院長として病院を福山市北部の医療を支える上でなくてはならない病院にすることです。福山市北部に住んでいる方々の健康を守ることがミッションだと思っております。達成するには時間がかかると思いますし様々な困難もあると思います。中にはすべてのご要望に応えられないこともあり、ご迷惑をおかけすることもありますが、当院でできる限りのことをしていき、できることを増やしていければと思っております。

そして今年、当院は開院60周年を迎えます。この60年間、昭和、平成、そして令和と時代が変わってきた中で様々な変化がありました。医療のあり方も激しく変化してきた中、今でもこうして当院がこの地で医療が提供できるのも、ひとえに近隣の皆様はじめ当院と連携してくださる医療機関の先生方のおかげです。厚く御礼申しあげます。次の5年、10年、そしてその先も「地域に望まれる理想の医療」を提供し続けていく所存です。本年も皆様にとって良い1年であることを祈念しております。今年も何卒よろしくお願い申し上げます。

謹んで新年の
ご挨拶を申し上げます。

看護部長　佐野　京子

昨年は元旦に能登半島地震が発生し、2日には羽田空港で航空機事故が起きました。また春から夏にかけて地震や豪雨などにより各地で甚大な被害がもたらされました。自然災害は突然襲ってくるものであり、日ごろからの危機管理の重要性を改めて感じています。決して他人事ではありません。我が国の災害医療体制は、阪神・淡路大震災の教訓をもとに築き上げられました。看護協会では災害発生時における看護ニーズに迅速に対応できるよう、災害支援ナースの養成を強化しています。当院にはその研修を受講した看護師はいないのですが、今後複数人が受講し、活動に参加し協力出来るようにしていきたいと考えています。

また2024年度は、マイコプラズマ肺炎も8年ぶりの大流行となりました。これからも様々な感染症に対する対策の継続は必要です。普段から災害や新興感染症へ備え、BCP（事業継続計画）の整備に努めていかなければいけません。訓練の在り方を見直し、BCPのブラッシュアップを図っていきたいと考えます。

今年は、第三者機関である日本医療機能評価機構の病院機能評価の受審が控えています。次世代医療機能評価のビジョンは「患者さんが安心して医療を享受でき、職員が働きやすく、地域に信頼される病院づくりに貢献する」です。受審は今回で5回目となります。受審を重ねるたびに、新たな課題が見つかり、さらにより良い医療の提供を目指すことに繋がっています。

看護部職員について、日々漫然と業務を行うのではなく、患者さんに安全で安心・安楽な看護を提供するために、私たちは何をすべきなのか今一度振り返り、専門職としての自覚を持って職務を果たしていけるよう指導していきたいと思います。そして職員がやりがいを持ち、元気に働ける職場環境を構築することが、私の役割と考えています。

地域の皆さまに期待される小畠病院であり続けられるよう、今後も努力していきたいと考えておりますので、温かいご理解、ご支援を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

本年が皆さまにとって良い年でありますよう、心よりお祈り申し上げます。

地域とともに歩んだ60年の軌跡

創立60周年を迎えるにあたって

～敬太郎徒然日記～

その四

（1983～1992年）

理事長 思い出コラム

「今に繋がる病院体制拡充のために』

【内科について】

1983年(S58)4月帰郷後当分の間常勤内科医は私だけでした。当時父の同級生の故・榎木頼文医師が毎週木曜日に広島から来て下さっており、加えて同年9月より旧知の正岡佳子医師に週1回の内科・循環器内科の診療を手伝って頂けるようになりました。1984年4月から広島大学第１内科(当時)より非常勤の消化器内科医の派遣が始まり、そのうちの一人が現副院長の原医師です。その後広島大第２内科から非常勤医師として呼吸器内科医を定期的に派遣して頂けるようになりました。そして現在では広島大学脳神経内科（第３内科）から常勤神経内科医１名と非常勤医2名、さらに非常勤ながら岡山大学から循環器内科医、川崎医大から糖尿病内科とリハビリテーション科の支援を受けています。これら内科全体を原副院長がまとめてくれています。

【ESWLと外科について】

1989年(H1)春、私の弟・小畠敏生が帰郷し外科・胃腸科を標榜し、その時胆石治療と尿路結石治療の目的でESWLを広島県東部で初めて導入しました。

しかし外科で当初見込んでいた胆石治療に対するESWLの効力は思わしくなく、早々と見切りをつけて腹腔鏡下胆のう摘出術を導入し、その実績は当地でも一定の評価を受けていました。その後はヘルニア、急性虫垂炎など消化器外科の症例も徐々に少なくなり2002年3月に小畠敏生医師が退職。後任に私の慶応大の同級生で元・川崎医大内分泌外科講師の片桐誠医師が着任。専門である甲状腺疾患の診療と一般外科、そして療養病棟の患者さんの全身管理も担ってくれていましたが、2016年3月には定年退職。その後、中井医師と和久医師に引き継がれましたが2021年3月に二人の退職とともに外科診療は休止となりました。

【泌尿器科について】

一方、泌尿器科では前任医の退職に伴い、1990年(H2)1月から広島大学より常勤の泌尿器科医を交代で派遣して頂けるようになりました。その初期に当時広大泌尿器科医局長だった安川明廣医師が初登板となり、それが当院の泌尿器科の新たな出発となりました。ここから非常勤医師の派遣も加わり当院での非観血的尿路結石の治療は勿論、泌尿器科診療全体が軌道に乗りました。さらに一旦大学に戻っていた安川医師が1993年(H5)に当院副院長として再登板になったことで、徐々に患者さんや手術件数が増え、広くは県東部全域、特にこの福山・府中2次医療圏における泌尿器科診療に大きく貢献できるようになりました。現在はこの態勢を大口泌尿器科部長が引継ぎ奮闘してくれています。

【眼科について】

1992年（H４）6月、川崎医大より常勤眼科医として瀧川医師が着任。当時この地域の数少ない眼科医で、日常のプライマリーな眼科診療から白内障の手術まで積極的な診療を行っていました。今でも糖尿病や循環器系疾患あるいは神経系の病気の眼科的チェックまでお願いできて、この地域において極めて貴重な存在です。

【看護態勢（体制）について】

一方、このように診療面で拡充するだけでなく、看護体制の確立も重要なポイントでした。正木総婦長の着任後その指揮のもと、念願の基準看護の承認を受けました。ここでやっと目指す機能的な病院としての形を整えることが出来たわけです。ここまで、帰郷後約10年かかりました。

このように医師の態勢と診療内容が明確となり、当院の役割を考えた看護態勢（体制）の構想に基づき、療養環境の改善や患者さんやスタッフの動線を整えるため、1992年(H4)年度の厚生省の補助金を受けて本館の改装と中館の増築を行うことが出来ました。

公式LINE始めました
お友達登録をお願いします

医療法人㈳玄同会 小畠病院（こばたけ びょういん）
〒720-1142 広島県福山市駅家町上山守203
公式ホームページ
TEL（084）976-1351㈹
FAX（084）976-6309
https://kobatake.or.jp